

《実施結果報告書》



広島平和記念式典派遣事業

2015年8月5日(水)～7日(金)



燕市

目次

I	広島平和記念式典派遣事業実施にあたって・・・・・・・・・・	1
II	ごあいさつ・・・・・・・・・・	2
III	広島平和記念式典派遣事業日程・・・・・・・・・・	3
IV	研修レポート・・・・・・・・・・	4
	① 出発式参加者決意表明	
	② 参加者レポート	
	燕中学校 長谷川 拓海	
	小池中学校 登坂 拓海	
	燕北中学校 黒田 崇幹	
	吉田中学校 諸原 菜津子	
	分水中学校 山浦 舞桜	
	③ 引率者レポート	
	学校教育課 指導主事 尾崎 誠	
	学校教育課 指導係主任 諸橋 圭子	
	④ 平和記念式典派遣事業の様子	
V	派遣事業の概要・・・・・・・・・・	25
	(資料) 非核平和都市宣言・・・・・・・・・・	28

広島平和記念式典派遣事業実施にあたって

燕市長 鈴木 力

広島・長崎の被爆の悲劇から、今年で70年が経ちました。年月とともに、戦争を知らない世代も増え、悲惨な記憶も風化しつつあります。そして、世界に目をむけてみますと、地域紛争や戦争、あるいはテロ行為によって、今なお多くの人々の尊い命が失われています。

燕市は、平成18年12月25日に「非核平和都市」を宣言しました。この宣言は、平和を愛する世界の人々とともに核兵器の廃絶と非核三原則を強く世界に訴え、核兵器のない真の世界恒久平和が実現することを願って行ったものです。

非核平和は私たち人類の普遍的な願いです。世界でただ一つの被爆国の国民として、今日、享受することのできる平和と繁栄が、戦争による尊い犠牲の上に築かれているということ、後世に永遠に語り継いでいくことが大切であると実感しております。

市内の5つの中学校から生徒を広島へ派遣し、今年で8年目となります。

千羽鶴奉納、広島平和記念資料館、原爆ドーム、原爆供養塔などの見学、被爆体験講話の受講、灯籠流しも体験してきました。その中で生徒たちは直接、目と耳で学び、肌で感じてきたことを報告会で発表していました。

これからも、体験して感じたことをそれぞれの学校、地域、家庭で伝えていただき、平和の大切さ、命の尊さについて考える機会を広げ、戦争や被爆又は身近な問題について、自らできること考え、行動してほしいと思います。今後の派遣生の活躍に期待しています。

終わりに、今回の事業実施に際しまして多くの方々からご協力いただいたことにつきまして、心からお礼を申し上げます。

ごあいさつ

燕市教育委員会教育長 上原 洋一

燕市では非核平和の推進と平和学習活動の一環として、平成20年度から毎年、市内の5つの中学校から生徒を広島へ派遣しております。

生徒たちは広島平和記念式典へ出席するとともに、各学校の生徒が平和の祈りを込めて、また戦争の犠牲となられた方々の冥福をお祈りして折った千羽鶴を「原爆の子の像」に捧げてきました。

広島原爆投下については、教科書にほんの数行でしか書かれていません。

教科書には載っていない、文字では伝わらないことはたくさんあります。今回、燕市内各中学校の代表として広島へ派遣された5人は、五感をフルに働かせ、あらゆるものを吸収してきてくれたことと思います。派遣生が、さまざまな体験を通して戦争、平和について感じたことは、この報告書を読んでいただければ分かるかと思っています。

世界で唯一の被爆国である日本が戦争と平和について考える時、そして核兵器の使用などという過ちを二度と繰り返してはならないと訴える時、被爆体験をいかに伝承するかが課題になってきます。

今年は、被爆70年ということもあり、広島平和記念式典には史上最高の参列者数だったと聞きました。70年という節目だから考えるのではなく、これから大人になっても派遣生のみなさんは、今回の体験で感じたことを同じ世代の人たち、後輩、家族、出逢う人たちとその思いを共有して行ってください。

最後になりますが、派遣生のみなさんを快く送り出してくださった保護者の方々、ご協力いただいた方々に感謝申し上げます、あいさついたします。

広島平和記念式典派遣事業日程

事前研修 7月16日(木) 18:30 ~ 19:30

- ◇ 学校教育課長あいさつ
- ◇ 参加者・引率者自己紹介
- ◇ 「広島平和記念式典」派遣事業について
 - ・事業概要説明(目的・活動内容等)・当日までの準備



1日目 8月5日(水)

- ◇ 出発式(燕市役所) 6:30 ~ 7:00
- ◇ 移動(燕三条~広島) 7:31 ~ 13:52
- ◇ 平和記念公園 14:10 ~ 16:10
 - ・千羽鶴奉納(原爆の子の像)
 - ・広島平和記念資料館見学
- ◇ 被爆体験講話(広島市青少年センター) 16:30 ~ 17:30
- ◇ 広島市内にて夕食 18:30 ~ 19:30
- ◇ ホテルにてミーティング 20:10 ~ 20:30



2日目 8月6日(木)

- ◇ ホテル発 5:50
- ◇ 広島平和記念式典参加 8:00 ~ 8:45
 - ・原爆死没者名簿奉納
 - ・献花、黙とう
 - ・平和宣言(広島市長)
 - ・平和への誓い(子ども代表)
 - ・来賓あいさつ
 - ・平和の歌(合唱)
- ◇ ヒロシマの心を世界に2015見学 9:10 ~ 11:00
- ◇ 広島平和記念公園 15:00 ~ 16:30
 - ・ボランティアガイドによる公園内見学
- ◇ 広島原爆死没者追悼平和祈念館見学 17:00 ~ 18:00
 - ・被爆体験記朗読会参加
- ◇ 灯籠流し参加 18:00 ~ 18:40
- ◇ 広島市内にて夕食 19:00 ~ 20:30
- ◇ ホテルにてミーティング 21:20 ~ 21:45



3日目 8月7日(金)

- ◇ ホテル出発 7:30
- ◇ 呉市内散策 7:30 ~ 11:00
 - ・呉市海事歴史科学館(大和ミュージアム)
 - ・鉄のくじら館
- ◇ 移動(広島~燕三条) 12:52 ~ 19:06
- ◇ 解散(燕三条駅) 19:10

報告会 8月24日(月)

- ◇ 報告会
 - ・教育長あいさつ
 - ・派遣概要報告
 - ・参加者より「学び」の報告
 - ・市長から参加者へねぎらいの言葉



研修レポート

①出発式参加者決意表明

②参加者レポート

燕中学校 長谷川 拓海

小池中学校 登坂 拓海

燕北中学校 黒田 崇幹

吉田中学校 諸原 菜津子

分水中学校 山浦 舞桜

③引率者レポート

学校教育課 指導主事 尾崎 誠

学校教育課 指導係主任 諸橋 圭子

④平和記念式典派遣事業の様子

平成27年度「広島平和記念式典」派遣事業出発式 参加者決意表明

燕中学校：長谷川 拓海

広島に原爆が投下され、70年がたとうとしています。70年の月日がたっても、原爆・戦争の恐ろしさを忘れないために、中学生の僕たちが派遣されるのだと思います。派遣される使命をまっとうするためにたくさんの方を見たり、聴いたりして、しっかり学びたいと思います。燕市に帰ってきたら、多くの人にこの貴重な体験を報告したいと思います。

小池中学校：登坂 拓海

僕はこの広島派遣で、授業などでは学べないことをたくさん学んできたいです。今年は戦後70年で、実際に被爆された方も高齢になってきているので、僕たちがしっかりと話を聴いて学び感じてきたいです。学校の代表という自覚をもっていきたいと思います。

燕北中学校：黒田 崇幹

僕は広島派遣を通して、「これからの平和」について考えたいと思います。最近のニュースでは、戦争の話題が多く取り上げられています。そんな今こそ、日本の未来を担う僕たちが戦争や平和について、自分の意見を持つべきです。そのために、今回を機に僕が学んできた悲惨な現実を学校や身の周りの人に発信し、少しでも多くの方が原子爆弾の恐ろしさや平和について関心を持ってくれるように、一生懸命頑張りたいと思います。

吉田中学校：諸原 菜津子

今回の広島派遣は、70年前、実際に原爆が落とされた現地へ行くことができる数少ない機会です。この機会を無駄にすることなく、原爆の威力の恐ろしさ、戦時下の生活を学んでくると共に、「平和」とは何か、世の中が「平和」になるために私たちは何をしていくべきかということもしっかり学んでいきたいです。また、学んできたことを家族や友達など周囲の人達にも伝えていきたいです。

分水中学校：山浦 舞桜

今年は終戦から70年の節目の年になります。広島の被爆者の平均年齢は80歳を超え、実際に被爆者からお話を聞ける機会はどんどん少なくなっています。しかし今回の派遣事業では、その貴重なお話を聴かせていただけることになっています。しっかり聴き、積極的に質問をしたいです。そして、分水中学校、燕市の代表という自覚をもち、学んできたことをたくさんの方に伝えられるようにがんばってきたいです。

① 事前学習 「広島原爆投下の背景」

〈原爆投下の理由〉

太平洋戦争における日本本土での直接戦を避け、早期に決着させるために原子爆弾が使用されたとするのがアメリカ政府公式の説明です。しかし日本は「アメリカがソ連との関係を優位にするためだった」と言います。

第二次世界大戦後の世界覇権を狙うアメリカが、原爆を実戦使用することにより、その国力・軍事力を世界に誇示し、原爆の開発にかかった膨大な費用をアメリカ国内に対して正当化したかったことも挙げられます。併せてその放射線障害の人体実験を行うために、広島にはウラン型、長崎へはプルトニウム型とそれぞれ違うタイプの原爆が、投下されました。

〈原爆投下の経緯〉

日本への原爆投下までの道程は、その6年前のルーズベルト第32代アメリカ大統領に届けられた科学者達の手紙にさかのぼります。そして、マンハッタン計画(DSM計画)により開発中であった原爆の使用対象として日本が決定されたのは1943年5月でした。一方、原爆投下を阻止しようと行動した人々の存在もありました。

日本が目標となった理由はドイツと違い原子爆弾開発の能力や核兵器の保有する可能性がないため、もし不発の場合でも技術を盗まれる危険性がなく、核兵器による報復攻撃の可能性がないと考えたからです。

投下目標は、原爆の威力を正確に測定できるよう、直径3マイル(約4.8 km)以上の市街地を持つ都市の中から選び、原爆投下まで町なみを残すため、5月



28日に目標都市への空襲を禁止しました。そして7月25日には目標都市の広島、小倉、新潟、長崎のいずれかに対する投下命令を下しました。広島を第一目標とする命令を出したのは8月2日。それは広島に連合国軍の捕虜収容所がないと思っていたためです。原爆は目視で投下することになっていました。8月6日、広島の日候は晴れ。広島の運命は決まりました。

② 学びの記録「広島平和記念資料館」

広島平和記念資料館は、核兵器の廃絶と世界恒久平和を求めるヒロシマの願いを込めて作られました。歴史的事実を踏まえた被爆前と被爆後の「広島をあゆみ」を写真パネル、映像、模型などにより展示する東館と、被爆の惨状を伝える生々しい資料などを展示する本館に分かれています。

<禎子さんの折り鶴>

2才の時、被爆した佐々木禎子さんは12歳の時突然、白血病を発症しました。折り鶴を千羽折れば、病気が治ると聞いた禎子さんは生きたいという願いを鶴に込めて懸命に折り続けましたが、8か月の闘病生活の後、亡くなりました。死



を知った子供たちが中心になって、原爆で亡くなった子供たちを慰め平和な未来を築こうと原爆の子の像が建立されました。「サダコと折り鶴」の物語は平和への想いと共に世界中に伝わっています。この話を知り、生きてくても生きられなかった人たちの分まで精一杯生きたいと思いました。

<原爆投下直後の広島模型>

原爆は地上600メートルの上空で目もくらむ光を放って炸裂し、爆心地から半径2キロメートルに及ぶ市街地の建物が跡形もなく壊され焼き尽くされました。人が身に付けていた衣服は熱線によって焼け焦げました。ほとんどの人々は血みどろになったボロボロの衣服を身にまとい、がれきの街を逃げ惑ったそうです。この展示を見て原爆の脅威を感じ、いち早く核兵器のない世界になってほしいと強く思いました。



③ 学びの報告

今回の広島派遣を通して、たくさんのことを学び、成長することができたと思います。広島では千羽鶴の奉納、被爆体験講話や広島平和記念式典、灯籠流しなどの活動で戦争の恐ろしさ、平和のありがたみを直接、肌で感じることができました。本当に貴重な体験をすることができたと思います。

「平和」と言うと、とても大きな事に感じますが、小さな事から平和につながるのだと思います。例えば、友達に思いやりの気持ちを持って接する、差別を絶対にしない、周りの人に感謝の気持ちを持つことなどです。一人ひとりの小さな変化が世界に大きな変化をもたらすはずです。

現在、被爆者の方の高齢化が進み、被爆者の方の話を聞ける機会が貴重になってきています。だからこそ、私たちが被爆者の方の想いを伝えていかなければいけません。畑谷さんは悲しみ、苦しみ、平和への強い思いが込められた講話をしてくださいました。

「戦争は命と引き換えであること」「幸せも苦しみも全て人が作ること」「一人ひとりが優しさを持つこと」これらは被爆体験者である畑谷さんが私たちに残してくれた言葉です。畑谷さんの想いをたくさんの人に伝えていきたいと思っています。ヒロシマの願いが世界に伝わることを願って…。

「小さな平和」から作りはじめましょう。



① 事前学習「原爆の被害・惨状」

<広島原爆による被害者数>

被爆時、広島市内にいた人の数は推定 35 万人です。そのうち、直接被害者（胎児も含む）38.5 万人、被害者総数は 55.7 万人でした。爆心地から 500m 以内での被爆者は、即死および即日死の死亡率が約 90% を越え、500m から 1 km 以内での被害者は、即死および即日死の死亡率が約 60% から 70% に及びました。さらに生き残った人も 7 日目までに約半数が亡くなり、次の 7 日間でさらに 25% が死亡しました。11 月までの集計では、爆心地から 500m 以内の被爆者は 98 から 99% が死亡し、500m から 1 km 以内での被爆者は、約 90% が死亡しました。

<広島原爆犠牲者の死因>

広島原爆犠牲者の死因には、主に 3 つあります。

1. **爆風** 爆風の強さは、爆心地から 500m の場所では、1m 四方の広さに 19t という巨大なものでした。爆風によってガラスが細かく砕け人の体につきささったり、爆風の圧力で目玉や内臓が体の外に飛び出したりしました。
2. **放射線** 広島には、原爆が爆発して 1 分以内に「初期放射線」が大量にふりそそぎました。これが人の体に大きな被害をもたらしました。特に、爆心地から 1 km 以内で直接放射線を受けた人は、ほとんど亡くなりました。さらに、そのあとには「残留放射線」がありました。このため、直接被爆しなかった人でも、救援・救護活動や肉親などをさがすために爆心地近くに行って放射線を受け、なかには病気になったり亡くなったりする人も出ました。
3. **熱線** 爆心地では地表の温度が 3,000~4,000℃ に達しました。爆心地から 1.2 km 以内で、直接熱線を浴びた人は、皮膚が焼き尽くされ、内臓などにまで障害を受けて、ほとんどが即死か数日のうちになくなりました。

<広島原爆による建物の被害>

原爆の強烈な爆風と熱線は、爆心地から 2 km 以内の建物をほとんど全て破壊し、焼き尽くしました。2 km を越える地域でも、木造の建物は大破以上の被害を受け、当時の広島市内の建物の 9 割以上が壊滅的な被害を受けました。被爆前の建物 7 万 6,327 件のうち、5 万 1,787 件が全壊または全焼しました。



↑ 赤色の範囲が全壊・全焼地域

② 学びの記録 「被爆体験講話」

<講和をしてくださった方>

畑谷由江さん 小学2年生の時に被爆（当時7才）
爆心地から1.4～1.5kmで被爆しました。

<原子爆弾が投下される前後の様子>

その日はとても天気が良く雨が降る様子は全くなかったそうです。

7時40分に空襲警報がなり8時頃解除されました。その後、畑谷さんは学校へ行くため、防空頭巾を持って8時10分頃友達の家に行きました。そして、8時15分に友達が家から出てきました。そのとき、友達の家屋根の上のところからピカッとももの凄い光が光った瞬間、畑谷さんは気を失いました。それほど威力があったそうです。畑谷さんは友達と一緒に地下に飛ばされたそうです。はしごの近くに飛ばされ畑谷さんは無事でしたが、友達ははしごの足をかける部分の間に体が挟まり、抜け出すことが出来ず逃げられなかったそうです。畑谷さんは、地上にいるお母さんにはしごを使って助けられました。

地上に上がった畑谷さんはそこで、とんでもない光景を目にしました。建物はほとんど瓦礫と化し、人は皮膚がはがれ、血はふきだし、目が飛び出ている、とても悲惨な光景だったそうです。倒れているたくさんの方が畑谷さんやお母さんに水を求めてきましたが、そのたびにお母さんが「ごめんね」と謝りながら通りすぎたそうです。畑谷さんもお母さんから水をあげてはだめと言われていました。

そして、原爆投下から10分後、黒い雨が降りました。畑谷さん達も黒い雨を浴びました。そのせいで、畑谷さんは冬になると手が異常に腫れ上がったそうです。現在は少し違和感があるくらいになったそうですが、心臓の病気を患っているそうで、今も後遺症に苦しんでいます。

<畑谷さんが後世の人達に伝えたいこと>

- ・戦争とは命と引き換えだということ。
- ・若い人達には戦争を経験してほしくない。
- ・これからの世の中で戦争という言葉を出してほしくない。

<感想>

僕は畑谷さんの話を聞いて、これからの世の中で、戦争を繰り返してはいけないと改めて強く思いました。そして、僕たちが、畑谷さんや他の被爆者の方たちの願いや思いを伝えていかなければならないと思いました。



③ 学びの報告

僕は今回の広島派遣でとても貴重な経験をしました。直接、被爆者の方の話を知ったり、広島平和記念式典に参加したりすることで、原子爆弾に対する考えをさらに深めることが出来ました。3日間の中で新潟には感じる事の出来ないたくさんのことを感じてくる事が出来ました。

その中でも特に平和記念資料館ではたくさんのことを感じる事が出来ました。原爆投下後の広島の写真やボロボロになった衣服などの遺品がたくさん展示してありました。どれも原爆の被害の強さを物語るものでした。教科書に載っているものもいくつかありましたが写真で見ると実際に生で見るとでは感じ方が違いました。原爆の被害の悲惨さや残酷さが伝わってきました。中には見たくない写真もありました。全身火傷をして顔が分からなくなっていて、人の形をしていることぐらいしか分からないような写真もありました。当時はそんな人がたくさんいたと思うと、原爆というのはとても残酷で悲惨な被害を人類にもたらすのだと今まで以上に感じました。

そして、そんな悲惨な被害をもたらす核兵器がまだこの世界に多く存在しています。僕は核兵器による被害を、周りの人から後世の人たち、そして後世の日本人から世界中の核保有国に伝えていかなければならないと思います。そして世界から核兵器がなくなる世の中を願いたいと思います。

原爆投下後の広島では「75年間は草木も生えない」と言われてから70年経った現在、緑豊かな都市になりました。広島はものすごい速さで復興をとげました。このままではいけないという当時の日本の気持ちはこの速い復興につながったのだと、被爆者の方は言いました。ここまで復興できた事はすごいと思います。争いごとは避けることはできないのかもしれないとある人がテレビで言いました。僕もそう思います。でもその争いを武力によって解決しようとする事だけは絶対にしてはならないと思います。この緑豊かな都市や発展してきたこの世界や尊い命を守るためにも。



① 事前学習 「長崎原爆投下について」

〈長崎原爆投下〉

1945年（昭和20年）8月9日午前11時2分にアメリカ軍が日本の長崎県長崎市に対して、原子爆弾を投下した出来事のことです。



〈なぜ、長崎に原爆が投下されたのか〉

もともと、アメリカは原爆投下する地域を「東京・名古屋・京都・大阪・広島・八幡・佐世保・長崎」と選んでいました。4月には、「京都・広島・新潟」に絞っていたのですが、「京都」は、「歴史的な文化財が多数ある都市」という理由で投下目標から外されました。そして、7月25日、「京都」が外されたことにより「広島・小倉・新潟・長崎」を投下目標とする、原爆投下命令が出されました。

実は、長崎には三菱重工長崎造船所があり、そこでは世界最大の戦艦「武蔵」などが作られ、軍事的な意味からも長崎に原子爆弾を落とす必要がありました。そして、8月9日、第二攻撃目標である九州の小倉へB29（ボックスカー）が向かいましたが、天候や意図的に製鉄所の煙幕を立ち込めさせた影響により、目標を第三目標である長崎に急きょ変えなければならなかったのです。運命のイタズラにより、長崎が2発目の投下目標都市に選ばれました。

〈長崎原爆の被害〉

爆心地付近では燃えるものが全て火をふきました。溶けたガラス、焦げて黒くなった石がその激しさを物語っています。爆心地付近の人はあまりの高熱に一瞬のうちに、身体が炭化し、内臓の水分さえも蒸発したと考えられています。

② 学びの記録 「ヒロシマの心を世界に」

〈ヒロシマの心を世界にとは〉

広島国際会議場で次世代を担う子どもたちが、世界恒久平和を願う広島のことを劇や講和など様々な形でメッセージとして発信するイベントです。広島県の方々はもちろん、県外からも「平和の大切さを世界へ発信したい」と思っている方々がいて、メッセージを伝えていました。



〈劇「広島戦災児育成所「童心寺」物語〉

広島市立舟入高等学校演劇部の方々が、劇で原爆で家族を失った「原爆孤児」の生き様を、生々しく表現していました。

〈物語〉

原爆孤児には、食べ物がない、家もない、そして、親がいない・・・それは、今の人には、とても想像できないほどの悲しみや苦しみを抱えていました。それでも、今を一生懸命に生きようとしている姿、そして、精一杯未来に向かって歩みを進めようとしている姿がありました。

〈感想〉

原爆孤児の現実には、本当に辛かったと思います。そして、それを伝えようとしている演劇部の方々の熱い思いが伝わってきました。



舟入高等学校演劇部「広島戦災児育成所「童心寺」物語」

③ 学びの報告

僕は今回の広島派遣を通して、今、平和に生活できていることへの感謝、そして、これから平和に対しどうあるべきかを考えることができました。

僕は今回、広島の悲惨な現実を初めて実感することができました。今までは正直、テレビや映画では僕の心はあまり動かなかったのですが、実際に原爆ドームを散策した時のガイドさんのひとことひとことがとても僕の胸に響きました。その時にガイドさんの「原爆はあそこの上空 600mに落ちて爆発した」、「この川は人で埋め尽くされた」という言葉と共にそこに吹いている風を重く感じました。

僕はこれから、平和で過ごすためには「支え合い」が大切だと思います。僕は実際、原爆ドームから広島駅まで戻る途中、電車の中で「平和ってなんだろう？平和にするためにどうすべきだろう？」と考えていました。そのとき、近くには4人座ることのできる席に2人のおばさんが座っていました。そして、一人のおばさんが「どうぞ、席が空いているので座ってください。」と声を掛けてくださいました。そのとき、おばさんが僕に平和にするための答えをくれたような気がしました。
「支え合いだ」



僕は、平和について勉強することはとても大切だと思います。ですが、平和という言葉に囚われ過ぎるのは良くないと思います。原爆の歴史を知りすぎて理論的になってしまうと、いつの間にか身近な平和を見失ってしまうのではないのでしょうか。

親切に人との関わること、これが一番身近な平和だと考えます。そして、
「困ったときはお互い様」

僕はこの言葉が「平和にするための肥料」であると思います。
これから世界中の明日が平和になるよう、僕は支えあって生きていきたいです。

① 事前学習「戦後の復興と平和について」

焦土と化した第二次世界大戦の敗戦からわずか20年余りで世界第2位の経済大国に上り詰めた日本。高度経済成長を成し遂げたその復活劇は、「奇跡」と称賛されました。

〈広島の復興〉

1949(昭和24)年5月の国会で「平和記念都市建設法」が定められました。この法律は、「永遠の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴」として、新しい広島市をつくることを目指したものです。この法律ができたことで、土地を無料で貰えたり、お金も足りない部分は国がだしてくれたりしました。

そして、平和記念公園や平和大通り、橋、住むところがなくなった人たちのための公営住宅などができました。

広島市の人口が戦争前のいちばん多かったときと同じ41万人まで増えたのは、戦争が終わって13年が経った1958(昭和33)年のことです。この年の4月に「広島復興大博覧会」が開催されました。

多くの市民がこのイベントで「復興を感じた」と言ったそうです。

〈平和を保つために〉

今年、終戦から70年にあたります。この間、日本は戦闘で1弾も発射せず、1人の戦死者も出ませんでした。海外に対する政治的ないし軍事的野心を一切持たず、抑制が効き、なおかつ、対外政策を保った「平和主義」は、経済的発展をもたらしたのです。

今、集団的自衛権の導入など、平和について大きな曲がり角に立っている日本。そんな日本にとって「奇跡」と言える今までの歩みを振り返ることは、これからの進路を考える上で、とても重要なことです。

私は、日本が戦後80年、90年、100年・・・といつまでも「戦後」というワードを使い続けられるような国に、私たち若い世代が、していかなければならないと強く思いました。

② 学びの記録 「広島平和記念式典」

広島に原子爆弾が投下されてから、70年。今年も広島平和記念式典が行われました。当日は、セミの声が鳴り響くとても暑い日でした。

今年の式典は、過去最多となる100か国と欧州連合の代表の方が参列し、アメリカからは、政府高官として初めてローズ・ガテマラー国務次官が出席しました。また、広島の永遠の平和を願う参列者は5万5千人となりました。

午前8時、多くの人が見守るなか、式典が開始されました。この一年で、死亡が確認された広島の被爆者は、5,359人。これまでに亡くなられた方たちと合わせて、29万7,684人の方の名簿が原爆慰霊碑の石室に納められました。その後、広島市議会議長による式辞、献花と続きました。

そして、午前8時15分。70年前、ここ広島に世界で初めて原爆が落とされた時間になりました。たった一発の爆弾が広島を地獄にした瞬間です。平和の鐘の音を聴きながら私は、もう二度とあのような惨劇が起こらないことを強く願いました。それと同時に、亡くなられた方たちにどうぞ安らかにお眠りくださいと思わずにはいられませんでした。

松井広島市長は、平和宣言で「広島をまどうてくれ(元通りにしてくれ)」と被爆者の悲痛な思いを代弁されました。そして、「世界の人々に対し、決意を新たに、共に核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くしましょう」と強く訴えました。

国連事務総長、潘基文(パン・ギムン)氏は、「国際社会は核兵器のない世界を実現することで、広島の経験を生かす義務があります」と国際社会も核兵器廃絶に向けて尽力し続けなくてはならないと述べました。

こども代表の2人は、「広島に育つ私たちは、事実を、被爆者の思いや願いを、過去、現在、未来へと私たちの平和への思いとともにつないでいく1人になることを誓います」と述べました。どなたからも70年前の悲劇を忘れてはいけないという強い思いが、伝わってきました。



③ 学びの報告

原爆ドームを見たとき、本当に建物がこんなになってしまうのかと本当に驚きました。教科書で見るよりもずっと迫力がありました。この建物はあの熱風を浴びたのか、だとすると、ここにいた人間は……。そう考えたとき背筋がゾッとしました。原爆ドームは、原爆の威力の凄まじさを物語っていました。

被爆体験講話では、7歳のときに被爆された畑谷さんから話を聞きました。

畑谷さんは、学校へ向かう途中、友達の家に着いたときに被爆されたそうです。今、畑谷さんは、心臓の病気を患っています。また、冬になると、血のめぐりが悪くなり、手がふくれあがる時があるそうです。70年たっても、放射能は体から抜けない。そのことを改めて痛感しました。

最後に畑谷さんは、次のようにおっしゃいました。「幸せをつくるのは人の手。1人1人が優しさを持って、何事も慎重に考えることが大切なのです」と。直接、話を聞くことで、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを今まで以上に考えることができました。

原爆は、「あっ」という間に多くの尊い命を奪いました。それだけでなく、生き残った人たちの体や心にも一生消えることのない傷をうえつけました。

私は、実際に広島に行って、「戦争を起こすのも、平和をつくるのも全て人間なんだ」というシンプルですが大切なことに気付くことができました。そして、原爆が落とされたという事実を、また原爆がもたらした事実を、70年たっても苦しんでいる人たちがいる事実を、被爆者の平均年齢が80歳を超えた今、今度は私たちが多くの人たちにしっかりと伝えていかなければなりません。

私たちの思いを込めた灯籠が、千羽鶴が、平和への架け橋になることを願います。



① 事前学習 「太平洋戦争時下の生活」

〈政府からの統制〉

1938年4月に国家総動員法が制定されました。この法律は戦争のため国家の全ての人的、物的資源を政府が統制運用できるというものです。また、1941年には金属類回収例が出され、戦争のため家から金属が回収されました。このような決まりの元、日本中が統制され全てにおいて「自由」と「勝手」が消えていきました。

〈子どもたちの暮らし〉

戦争が長引き、食べ物が不足していきました。当時と食習慣は異なりますが、2010年に厚生労働省が算出した「日本人の食事摂取基準」では1日、14歳男子は2500キロカロリー程度を必要としています。しかし、戦争末期の14歳男子は1300～1400キロカロリーほどしか摂取できていなかったといえます。

戦況が悪化していく中で軍部は兵力を必要としました。1943年には徴兵年齢は19歳～45歳に拡大され、その結果、未成年の子供も戦地に送り出されるようになりました。そして、徴兵により農村、工場は働き手を失いました。そこには子供や女性が根こそぎ動員されましたが、生産力は低下しました。そこで不足する労働力を補うため、さらに子供、女性を中心とした勤労働員が行われました。1944年には学徒動員令で中学2年生以上、国民学校高等科生徒も動員されました。動員学徒の主力は16歳以下の子供でした。終戦直前の1945年7月の学徒動員数は343万2000人でした。そのうち、16歳以下の子供たちの割合は94%を占めその数は323万7000人でした。

このように、当時の子供たちは戦争によりたくさん影響を受けました。十分な食料も得られないまま勤労働員によって働かされ、肉体的、精神的にもつらい生活を送っていました。

②学びの記録 平和記念公園

<原爆供養塔>

原爆供養塔は氏名不詳や一家全滅などで引き取り手のない遺骨を供養するために建てられました。土盛りの内部には納骨堂があり引き取り手のない遺骨が納められています。毎年、名簿が公開され今でも遺族の方を探し続けています。



<被爆した墓石>

これは実際に原爆の被害を受けた墓石です。爆風により墓石が吹き飛んでしまっています。それが、爆風の凄まじさを物語っていました。また、この墓地だけが、平和記念公園の中で被爆当時の地面をとどめています。公園が盛り土して建設されたため、周囲を石で囲んで池の底のようになってしまったこの部分が当時の地面です。



<平和の池・灯>

多くの原爆犠牲者が亡くなる前に水を求めていたことからこの公園内にはたくさんの水があります。平和の灯は1964年8月1日に点火されてから燃え続けています。そして、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核祈願の象徴となっています。



③ 学びの報告

私はこの3日間で命の尊さ、平和の大切さ、そして原子爆弾の恐ろしさを改めて深く学ぶことができました。被爆体験講話では、7歳の時に被爆された畑谷さんが原爆落下直後のことを詳しく話してくださいました。お話の内容は、本当にこの美しい街がそんな状態だったのかと耳を疑うようなものでした。畑谷さんはお話をされている途中、当時のことを思い出したのか、何度か辛そうにしながらも、くりかえし私たちに戦争や原爆は本当に怖いものだ伝えてくださいました。

平和記念式典では子ども代表のまっすぐな言葉が詰まった平和への誓いが心に残りました。また、今年は原爆投下から70年の節目の年ということもあり、たくさんの外国人も参列していました。この式典が日本だけでなく、世界の平和のための式典になってきているのではないかと思い、嬉しくなりました。

原爆が投下された当時、「75年草木も生えない」といわれていた広島。しかし70年たった今の広島は緑が茂り、色とりどりの花が咲く美しい街でした。その美しい街をもう二度とあのような悲惨な状況にしないためにこれから私に、何ができるのか、何をしていかなければならないのか、もっとたくさんのことを学び、その答えを見つきたい。そう思います。きっと私一人でできることはそう多くありません。ですが、小さな努力を一人一人が続けていけば大きな力になります。その大きな力は平和を作ることができると思います。世界平和が実現することを祈って…



(引率者) 学校教育課 指導主事 尾崎 誠

「広島に原子爆弾が投下された年月日と時刻を知っていますか。」

2011年7月に実施された広島市教育委員会の調査によれば、広島市の小学生の正解率は33%、同じく中学生は55%でした。

話は変わりますが、燕市中学生平和大使5名と一緒に、今回私が見聞したことの一部を記させていただきます。

8月5日、被爆体験者の畑谷由江(はたたによしえ)さんから当時のお話や平和への願いをお聞きしました。7歳(小学2年生)の時、友達と小学校に向かう途中原爆にあい、今も心臓病と闘っていらっしゃるそうです。また、被爆後しばらくは冬になると腕が倍の太さ以上に腫れあがり筆舌に尽く



しがたい痛みに苦しまれたそうです。しかし、自分は運がよく、爆風で地下に吹き飛ばされたため命が助かったとおっしゃいました。友達が目の前で瓦礫に挟まれ動けなくなっていたが、自分の力では助けることができなかった。こうやってお話するたびに、その光景を今でも思い出すが、助けてもらった命だから、私の命ある限り「絶対に戦争なんかしてはいけない」ことを若い人に伝えていきたい。1時間30分にわたって、時に涙をこらえながら、貴重なお話をうかがうことができました。

8月6日、式典では午前8時15分に1分間の黙祷が捧げられました。式典直後の「ヒロシマの心を世界に2015」では、広島市立舟入高等学校演劇部の熱演に心を打たれました。今年は、事前の取材も行い、原爆孤児が時に過去を振り返りつつも、今をそして未来を、精一杯生きようとする姿を生き生きと描きだしていました。わずか15人で語りやキャストのほか、演出や照明、音響や舞台装置を分担し、プロ顔負けの快演でした。国際会議場の大ホール、大勢の立見客がでるほどの盛況でした。



現地ガイドの一橋守(ひとつばしまもる)さんからは、60年前に原爆ドームが取り壊されそうになった話を伺いました。今でこそ世界遺産となり、保存のための努力が行われていますが、当時は被爆された方の中にも、原爆ドームを見るたびにあの日のことを思い出してしまうという理由で取り壊しを希望、推進

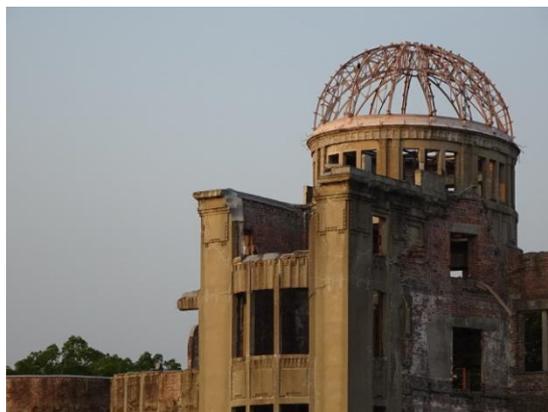
された方がいらっしゃったということでした。一橋さんは、案内の中で、もし原爆ドームが無くなっていたら、いくら平和記念公園が残っていても、戦争や原爆投下の記憶はもっと風化していただろうと解説されていました。



被爆体験記朗読会では、『原爆の子』(岩波文庫)、『原子雲の下より』(青木書店)に掲載されている体験記や原爆詩の朗読を聞いたり、そのいくつかを声を合わせて一緒に読んだりしました。中でも坂本はつみさん(当時小学2年生)がかかれた「げんしばくだん」という3行の詩、昨日の畑谷さんのお話とオーバーラップして深く心を打たれました。

げんしばくだんがおちると
ひるがよるになって
ひとがおばけになる

朗読会の主催者の方がくしくも、「広島市の小中学生でも関心が薄れてしまっていて…」とおっしゃっていました。また、「読み語ることによって、少しでも被爆者の記憶や思いを共有し、次の世代へと引き継いでいきたい」とおっしゃっていました。



今年、原爆投下から70年となり、広島では大きな盛り上がりを見せたそうです。きっと広島では、平和を祈る心とともに、昭和20年(1945年)8月6日、午前8時15分という記憶も引き継がれていくことでしょう。そして、燕市中学生平和大使5名もきっと。

今できることから

私にとっては、今回が2度目の広島訪問。1度目は、高校の修学旅行、今回は、広島派遣の引率者として訪問となりました。

広島平和記念公園は、8月6日、特別になります。いくつものテント。数えきれない数の椅子、花々。そして途切れることなく祈りを捧げる人々の列。

修学旅行で訪れた時の広島平和記念公園は、ただ芝生が広がっていただけで、式典が行われる8月6日とまるで違う景色が広がっていました。



被爆70年、節目の年となった平成27年の広島平和記念式典。この式典中、広島市長は平和宣言で、「家族、友人、隣人などの和を膨らませ、大きな和に育てていくことが世界平和につながる。思いやり、やさしき、連帯。理屈ではなく体で感じなければならぬ。」と訴えた原爆投下当時、16歳だった女性の言葉を引用しました。「理屈ではなく体で感じなければならぬ。」現在、私たちが考えないといけないのは、このことではないかと感じました。理論や根拠を追求し、人が持つ感情を軽視し、相手を思いやる気持ちを忘れてしまう。その小さな積み重ねが、軋轢を作り大きな争いへと繋がっていくのではないかと。

派遣生たちが被爆体験者の方に質問する真剣なまなざし、原爆ドームを見つめガイドの方の話をじっと聴き入る姿。電車内で出会った広島市民の方との交流。それぞれの体験で平和の大切さ、命の尊さを感じ、戦争や被爆体験の語り継ぐことの必要性、一人一人のやさしきが重要ということを知ったのではないかと思います。それは派遣生が「小さな平和から考える」「支え合いが大事」と派遣後の報告会で語っていたからです。

戦争や被爆といった自分たちとはかけ離れ、実感しにくいことであるのに、自分ができることを考えている中学生たちに驚きました。そんな子どもたちに、私が手助けできることは何かを考え、私もできることからやっていきたいと思えます。

今回、このような機会を与えていただいたこと、ご協力いただいた皆様に心から感謝いたします。

平和記念式典派遣事業の様子



出発式にて



広島平和記念資料館にて



千羽鶴奉納



平和記念式典会場



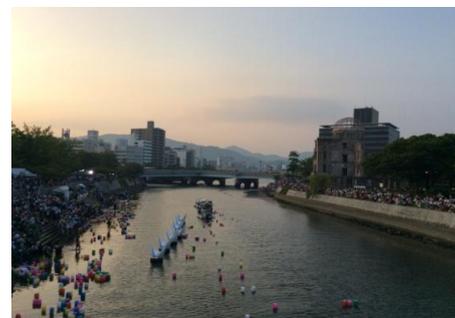
平和記念式典会場にて



原爆ドームにて



灯ろうに願いを込めて



灯籠流し



報告会の様子

1. 派遣事業の概要

派遣事業の概要は次のとおり。目的を理解し、有意義な学習活動となるよう留意する。

(1) 目的

非核平和宣言都市推進事業及び平和学習活動実施の一環として、広島平和記念式典をはじめとするさまざまな催しに次代を担う中学生を派遣することにより、国際的な視点をもって命の尊厳や平和の尊さについて理解できる生徒を育成することを目的とする。

(2) 日程

平成27年8月5日（水）から平成27年8月7日（金）まで

(3) 主な活動内容

- 広島
- ①広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式への参列
 - ②広島平和記念資料館、原爆ドーム、原爆死没者慰霊碑等の見学
 - ③原爆の子の像に各校で作成した千羽鶴の奉納
 - ④被爆体験講話の受講
 - ⑤灯籠流しへの参加
 - ⑥全校生徒への報告（←事後）
- （2学期はじめ、各学校で報告会などを実施する。→報告書の提出）

(4) 行程

（広島平和記念式典派遣事業行程表のとおり）

出発式：8月5日（水）午前6時30分 燕市役所101会議室

(5) 参加者名簿

氏名	よみ	性別	学校名	学年	備考
長谷川 拓海	はせがわ たくみ	男	燕中学校	3	
登坂 拓海	とさか たくみ	男	小池中学校	3	
黒田 崇幹	くろだ たかき	男	燕北中学校	3	
諸原 菜津子	もろはら なつこ	女	吉田中学校	3	
山浦 舞桜	やまうら まお	女	分水中学校	3	

(6) 引率者

燕市教育委員会 学校教育課 指導主事 尾崎 誠
学校教育課 指導係主任 諸橋 圭子

2. 派遣事業参加中の役割分担

自主的な学習活動を進めるため、役割分担をする。

役割分担の内容		人数	氏名 (中学)
(1)	ミーティング司会	1名	山浦 舞桜 (分水中)
(2)	記録 (見学・訪問先等)	2名	黒田 崇幹 (燕北中)
			登坂 拓海 (小池中)
(3)	被爆証言講話講師へのお礼のことば	1名	諸原 菜津子 (吉田中)
(4)	引率者との連絡調整	1名	長谷川 拓海 (燕 中)

3. 学習の過程及び分担

より有意義な体験にし、各学校の全校生徒へより効果的に伝えるため、「事前の学習」、「学びの記録」、「学びの報告」という3ステップで学習活動を進める。

(1) 事前の学習 (当日までに、各自が調べておく。)

事前に以下のことについて学習し、より充実した体験とする。

- ① 日程及び資料の確認 (担当: 全員)
- ② 被爆体験者への質問 (担当: 全員)
- ③ 太平洋戦争戦時下の生活 (担当: 山浦 舞桜)
- ④ 広島原爆投下の背景 (担当: 長谷川 拓海)
- ⑤ 原爆の被害・惨状 (担当: 登坂 拓海)
- ⑥ 戦後の復興と平和 (担当: 諸原 菜津子)
- ⑦ 長崎原爆投下について (担当: 黒田 崇幹)

(2) 学びの記録 (参加中の体験、学習)

以下の項目について担当がそれぞれレポートとしてまとめる。

- 広島での学び
- ① 平和記念公園 (担当: 山浦 舞桜)
 - ② 平和記念資料館 (担当: 長谷川 拓海)
 - ③ ヒロシマの心を世界に 2015 等 (担当: 黒田 崇幹)
 - ④ 被爆体験講話 (担当: 登坂 拓海)
 - ⑤ 広島平和記念式典 (担当: 諸原 菜津子)
- (広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式)

(3) 学びの報告 (まとめ)

参加前の学習や実際に3日間の研修に参加して得たものや感じたこと、またこれらの経験を受けて、全校生徒や周りの人に伝えたいことをまとめる。

さらに、それらの内容をもとに各学校で報告会などを実施する。

広島平和記念式典事業報告会：8月24日(月)午後6時30分から8時

☆提出について

以上の内容について、まとめたものを8月20日（木）午後6時30分から8時
報告会事前リハーサルのときに持参。

- ①事前の学習・・・担当箇所をA4に1枚でまとめる（写真、資料挿入可）
- ②学びの記録・・・担当箇所をA4に1枚でまとめる（写真数枚）
- ③学びの報告・・・参加者全員がA4に1枚でまとめる（写真1枚）

※上記①～③については、

[ワープロソフトを使う場合、次の書式を標準とする。]

- ・A4 たて
- ・明朝体 12ポイント
- ・余白（上：35mm、下：35mm、左：30mm、右：30mm）

④報告会の発表資料 （パワーポイント可）

④参考HP例

広島平和記念資料館 web site

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/index2.html>

キッズ平和ステーションヒロシマ

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/kids/index.html>

広島平和記念資料館「平和データベース」

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/database/>

4. その他

①宿泊先 ビジネスホテル クレ

住 所： 〒737-0051 広島県呉市中央 1-6-10

TEL： 0823-21-9429

資料 「非核平和都市宣言」 (平成18年12月25日)

美しい自然を愛し平和を願う心は人類共通のものです。

これを根底から揺るがし、地球環境と人類の平和を脅かす核兵器は絶対に容認できません。

世界でただ一つ悲惨な体験をした被爆国の国民として、核兵器の廃絶と非核三原則をいま一度世界に向け強く訴えていかなければなりません。

人と自然と産業が調和しながら進化するまちづくりをめざしている燕市は、新市誕生を機として、決意を新たに世界の恒久平和を願い、ここに「非核平和都市」を宣言します。

燕 市

被爆アオギリ二世

被爆アオギリ二世の親木のアオギリは、爆心地から北東1.3 kmにある中国郵政局の中庭で被爆しました。爆心地側の幹半分が熱線と爆風により焼けてえぐられましたが、焦土の中で青々と芽を吹き返し、被爆者に生きる希望を与えました。その後、このアオギリは昭和48年(1973年)に平和記念公園内に移植され、今でも樹皮が傷跡を包むようにして成長を続けています。被爆アオギリ二世は、このアオギリの種から育てられたもので、「平和を愛する心」、「命あるものを大切に作る心」を育み、平和の尊さを伝えるとともに、過ちを再び繰り返さないよう、被爆の実相を後世に伝えます。

燕市 平成19年4月 植樹



燕市役所正面出入口前



広島平和記念式典派遣事業実施報告書

2015年8月5日(水)～7日(金)

燕市教育委員会学校教育課